社会への発信

　社会はさまざまな課題を抱えています。医療界では、超高齢社会の進展する中、歴史に残るコロナ禍を経て、働き方改革、DX にも取り組まなくてはなりません。What：何が問題か？ Why：その原因は何か？ そこを確実にとらえてこそ、How：どう解決するかが見えてきます。大切なことの一つは、市民の皆さまにいかに発信するか、いかに啓発するかということではないでしょうか。私の関わる取り組みをいくつか挙げてみます。

褥瘡（じょくそう）　床に就いている時、体にさまざまな外力が加わって生じる治りにくい傷が褥瘡（床ずれ）です。患者さんの身体的要因、介護の質と量、取り巻く環境などが発生リスクとなります。私が理事を務める日本褥瘡学会・在宅ケア推進協会では、床ずれ予防プログラム®という書籍を制作しました。その目的として、褥瘡発生のリスク評価をケアプランに組み入れて欲しいのです。動画を用いたセミナーも計画しています。特に在宅療養の場で、ご家族やケアマネジャーさんに正しい知識とスキルを持っていただけるよう、さらなる発信を続けていきます。

足病対策　人は加齢により、歩けなくなる、食べられなくなる、認知できなくなる、という過程を経て、支援や介護が必要になっていきます。歩くことの重要性、そして健やかな足が大切であることを啓発するため、足病やフットケアに関わる医療者が思いを一つにして、ぐんま足人（あしんちゅ）の会（https://ashinchu.org）を結成しました。コロナ禍の期間はオンラインセミナーが主体でしたが、やはり実際に集まって学ぶことが重要と考え、2 月 24 日に群馬県庁にて市民啓発イベント「ASHISM 2025（アシ-イズム 2025）」　を開催いたします。講演やブース体験、足人かるた大会などを通して楽しく学ぶ企画です。

メディアの活用　健康カルテに何度か原稿を寄せましたが、『記事が載っていましたね』と患者さんに言われることが多く、新聞というものの影響力を感じます。
私は以前から、〇〇さんから聞いたんだけど、という話は眉つばものだと答えていましたが、今やネット上には発信元のわからない情報が飛びかっています。
この先生が言っているから安心！と思われるような医師でありたいと思います。

病院からの発信　当院では年 4 回、院外広報誌ほほえみを発行しています。編集に携わる中で思うのは、市民の皆さまの生活に密着した病院でありたいということ

です。ホームページなどオンラインも活用しながら、リアルな発信として、市民公開講演、がん患者さんの「サロンあおぞら」などがあります。コロナ禍で休止していたハッピー健康相談室も再開予定です。また意見箱でいただいたご意見は病院の宝と考えて、真摯にお答えしていきたいと思っています。

「眼」　昨年、姫路で開催された日本褥瘡学会学術集会で「社会を啓発するチカラ～次代に向かう発信力～」というシンポジウムを企画しました。掛川で地域密着をめざす病院長、山形市と連携してフットケアに取り組む介護福祉士、情報の力で社会を変えようとする看護編集者など、全国で先駆的に活躍する皆さんにご登壇いただきました。シンポジストに共通して言えるのは、それぞれの専門領域において本質を見極める「眼」が良いことでした。ゲーテが言うには、目の前にあるものを自分の目で見ることが、簡単そうで一番難しいことなのだそうです。

【副院長兼皮膚科診療部長　岡田　克之】